つながりつづくよ 人の輪 地域の和

読谷村

「地産地消連絡会」は、消費者と生産者の情報を集約し地元食材の有効活用を目指します。

産地消」の取り組みを村内小中学校の学校給食で行っています。この取り組みを円滑に進める上でカギを握るのが「地産地消連絡会」。

平成十六年に発足した同会は、規格外で換金が難しい農産物の有効活用や計画生産につながる流通システムづくりを大きな課題とし、最初に取り組んだのが、学校給食への食材供給でした。翌月の献立を決定する直前に行われる会議では、栄養士が使いたい食材を提案し、JAが調達量を返答するといった内容を中心に進行。学校の栄養士、調理担当者、JA関係者、行政担当者のほかに、「地元食材コーディネーター」が参加しています。コーディネーターは同会のキーパーソン。「学校給食側や農家、JAの要望など、それぞれの情報の一元化を担うのが地元食材コーディネーター。信頼関係づくりの要です」と、同村農業推進課の城間康彦さんは語ります。

読谷村役場 農業推進課の城間康彦さん

行政がサポート
農産物の需要と供給、そのマッチングをめざして

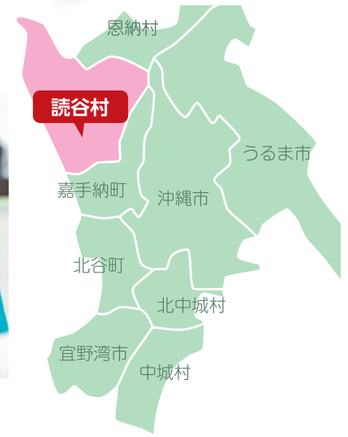
現在、読谷村では、地元の農産物や水産物を積極的に活用する「地

村内で採れたゴーヤーのおかずを頬張る子どもたち。毎月16日（イモの日）はイモが献立に登場

強い信頼関係
三年間の実証試験期間。試行錯誤を繰り返しながら

特産品である紅イモを使った紅イモチップス、紅イモのお菓子などをJA女性部や生活研究会で調達・納入することからスタートした同会の活動は、平成十九年、本格的に動きだしました。当初の取り組みとして、栄養士から必要な食材を聞き取ってリストをつくり、農家へ供給依頼に出かけ、納入・検品まで、きめ細かいコーディネートで、実績を積み上げていきました。「学校給食は、衛生面はもちろん、納入の時間も厳しかった。食材を使う当日の朝七時半から八時半の一時間で納入しないとダメ。検品に立ち会い、問題が起こったら、その報告書づくりまで行いました」と前地元食材コーディネーターで現在は読谷ファーマーズマーケットで加工開発を行う上地成子さん。同会に参加する皆が情報を共有できるように調整を重ねてきたおかげで、担当者間の強い信頼関係が築かれ、学校給食からの食材の発注は年々増加傾向にあります。

読谷ファーマーズマーケットで加工を担当する上地成子さん



相乗効果
子どもたちは食べ残しがなくなり、生産者はヤル気に

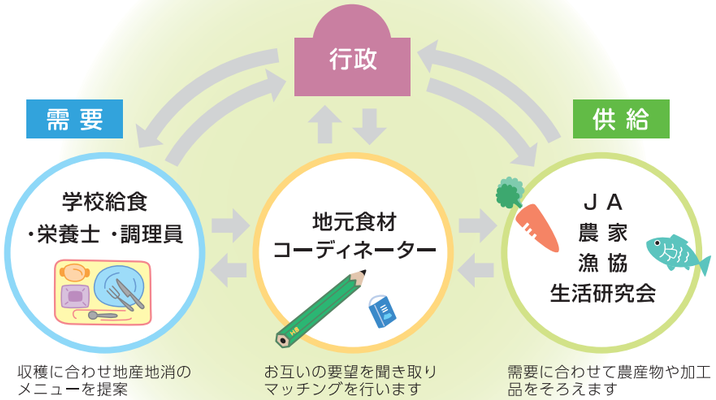
回会の活動は、子どもたちの食育、生産者の意欲向上に効果をあげています。食材を作った方々の名前が給食便りで紹介されたり、生産者が給食の場へ招かれ一緒に食事をする取り組みが行われたことで、給食の食べ残しが減りました。「給食での利用に合わせて作物を植え付けたい、という生産者からの相談も増加。今、確かな回答ができるように過去の食材発注データをまとめています」と地元食材コーディネーターの比嘉優祐さんは、地産地消流通システムの発展期における新たな取り組みを語りました。

新鮮な農産物や加工品などが並ぶ「ゆんた市場」。県内ファーマーズマーケットでは初となる食材加工場と食育情報スペースを持つ

地元食材コーディネーターの比嘉優祐さん

昨年は、生産圃場の見学会や、約八十人参加のJAおきなわ主催・地産地消大交流会も実施。今年四月には生産物の集積拠点、読谷ファーマーズマーケット「ゆんた市場」がオープンし、夢はさらにふくらみます。「将来は、参加する農家の圃場にのぼりを立てての活動PR、ホテルや福祉施設への供給も担いたい」と城間さん。同会からは、地元農産物を使用したお菓子などの商品も生まれました。食育、生産者の意欲向上、起業促進など、地元を元気にする同会への期待は高まります。

読谷村の地産地消連絡会



毎月一回行われる会議。忌憚のない意見のやりとりは信頼関係が築かれているからこそ

編集後記

先日、とあるご縁で門中墓で行われるシーミー（清明祭）に参加しました。同じ門中の方々が親戚ごとに続々と訪れるため、普通の数倍はあろう大きなお墓も満員状態。大勢の人々が一同に集まる姿に、先祖を敬う沖縄の風土の素晴らしさを感じました。(kai)

広報誌の作成にあたって、自分が生まれ育った沖縄でも知らなかったことがたくさんあり、勉強不足を痛感しています。市町村の取り組みや、沖縄の企業を紹介していくことで、皆様が知らなかった沖縄をもっと紹介していければと思います。(tama)

平成23年6月1日発行 第35巻6号通巻429号
沖縄県広報誌 美ら島沖縄
企画・編集・発行　沖縄県知事公室広報課
〒900-8570　那覇市泉崎1-2-2　TEL.098-866-2020

アンケート
「美ら島沖縄」の感想をお聞かせください。
▶パソコンはこちら 美ら島沖縄 検索
▶携帯電話は、右のQRコードから